

円相の家



兵庫県明石市

家族構成 夫（60代）妻（50代）

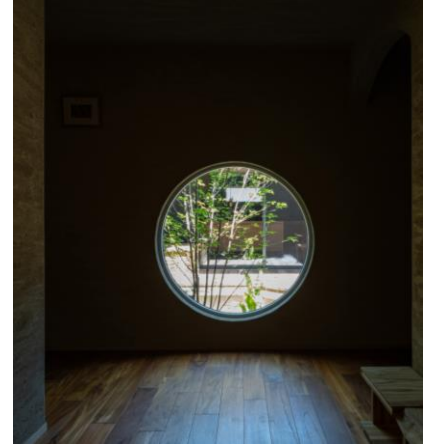
延床面積 109.18㎡（33.02坪）

木造 在来工法 平屋

断熱性能 UA値 0.44W/㎡K C値 0.3㎠/㎡

太陽光発電 7.2kW

許容応力度計算耐震等級 3



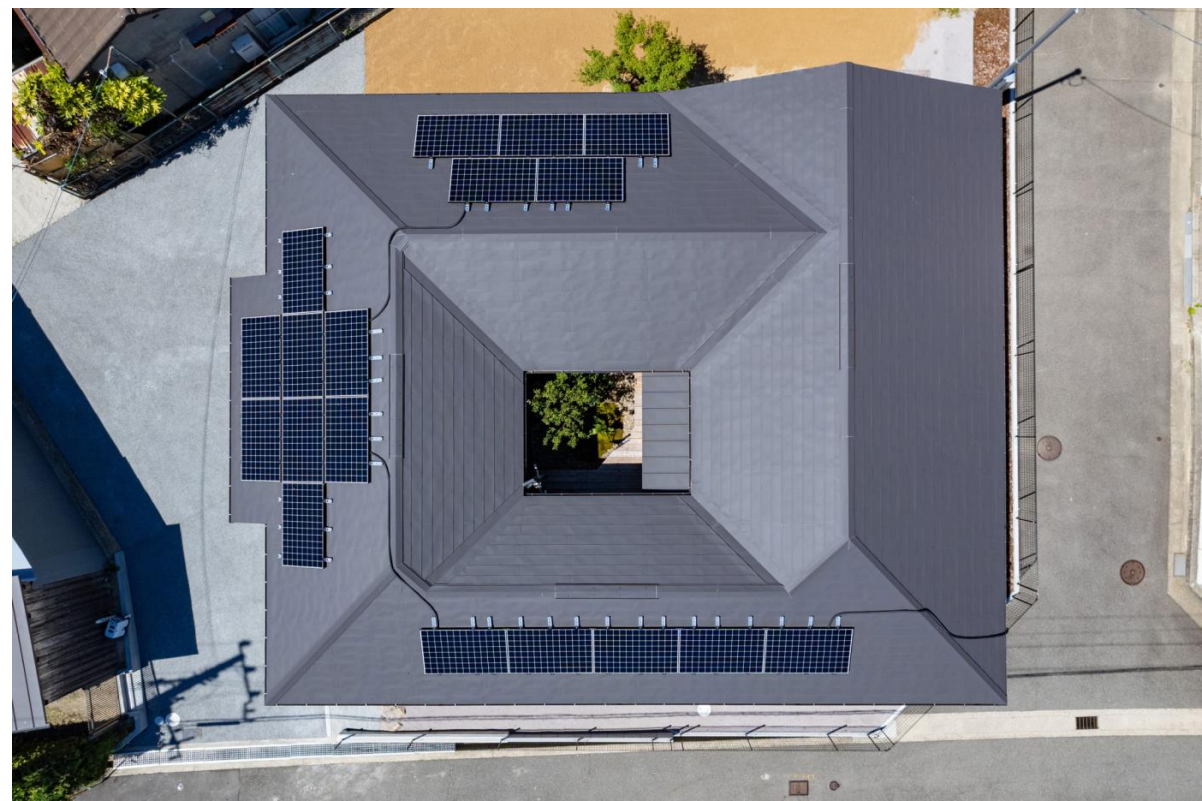
本計画は、ご夫婦が人生の後半を心穏やかに過ごすための「終の棲家」として構想された。敷地は明石城公園にほど近い高台にあり、街並みに馴染みながら静かで豊かな日常を育むことが求められた。

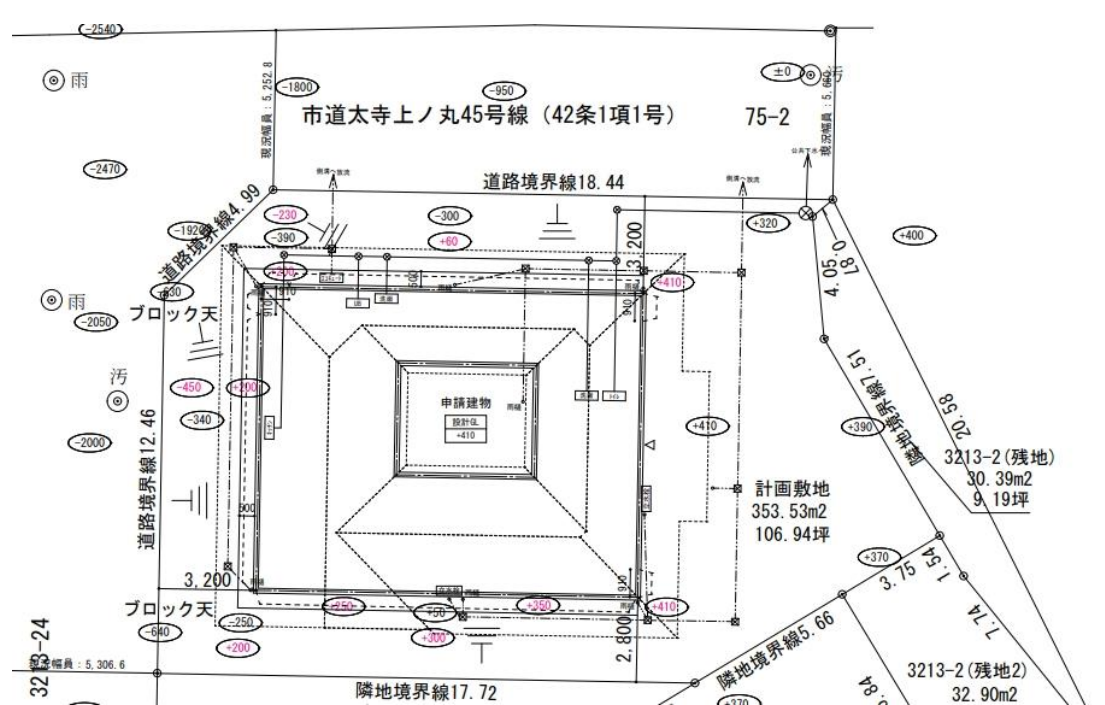
要望は、木や自然素材に包まれ、四季の移ろいを感じつつ日々を丁寧に楽しむこと。そして家の中にいくつもの「居場所」があり、住宅地においてもプライバシーを気にせず過ごせる空間であった。

象徴的なのは屋根のかたちである。神社の向拝を思わせる深い庇に加え、渦巻きの形をしており、循環や繋がりといった意味を持たせた。ドローンで俯瞰すれば、口の字型の構成は大地に描かれた円相のように浮かび上がる。

内部は外観の象徴性を取り込み、玄関の丸窓から中庭が切り取られる。回遊動線は来客と家事に分けられ、廊下幅も将来を見据え余裕を確保。主寝室は兵庫県産杉のR天井で包まれ、中庭の揺らぎを望む。ご主人の書斎、奥様の家事室、LDKなど、それぞれの居場所が緩やかにつながり、光や風、素材の表情が日常を豊かにする。

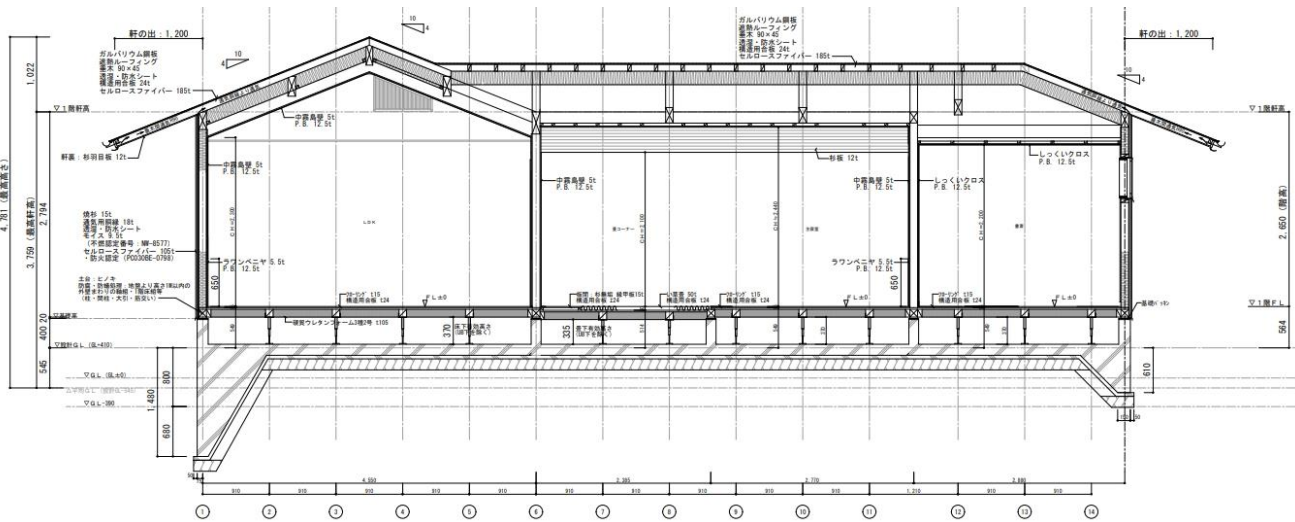
中庭には思い入れのあるヤマボウシを植え、四季の花や紅葉を楽しむ。正方形に切り取られた空は「光の坪庭」となり、住まい全体に奥行きを与える。こうして完成した「円相の家」は、外観と内部、伝統と現代、個と共の暮らしが呼応する住宅である。屋根と庇の陰影は循環を思わせ、円窓や中庭は静謐を映す。終の棲家として日常を支え、地域に静かに佇む姿を目指した。





南西側に母親が住む土地に、夫婦の二人暮らしの平屋。北側隣地に比べて敷地が高いことや、これまでの暮らしのなかで周りの視線を気にせず暮らしたいということから中庭のある家を計画しました。

夫婦が気兼ねなく過ごせる中庭を中心に、円を描くように回遊できる平面計画とした。家事動線は北側にまとめ、居間・主寝室・書斎など夫婦の居場所は南側に配置し、光と景色を享受できるように計画している。廊下はバリアフリーを考慮し、車椅子でも通れる幅を確保。さらに主寝室前の通路は引き戸を開放することで一体的に使えるよう工夫した。各居室は用途と動線に合わせて配置や窓の形を決定し、中庭を介して互いにつながり合う。暮らしの循環を包み込み、夫婦が安心して余生を楽しめる住まいを目指した。



周囲から中庭に視線が入らないよう屋根形状を工夫しつつ、周囲に圧迫感を与えないよう軒高を低く抑えた。高低差のある敷地には深基礎で対応し、無理のない自然な外観となるよう心掛けた。中庭にはやわらかな光が届き、空を切り取るような場となるよう、屋根形状を慎重に検討した結果、明石市上ノ丸に建つこの住まいの屋根は「円相」を思わせる形となった。

深い軒を持つ寄棟と横貼りの焼杉により平屋の水平ラインを強調し、リビング部分は船底天井を活かすため切妻とした。南立面の玄関前の屋根は、神社建築の向拝を参考にデザインし、迎え入れるような表情を与えている。

